様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０３５４

研究課題名（和文）アジア地域における通過儀礼と社会変容

研究課題名（英文）Reconstruction of interrelationship of the rite of passage and social complexity of ancient Asia.

研究代表者
舟橋　京子（石川京子）（Funahashi, Kyoko）

九州大学・総合研究博物館・助教

研究者番号：８０６１７８７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：アジア地域における通過儀礼と社会変容について、各地の遺跡出土古人骨と発掘情報から研究を行った。古人骨の歯牙を用いて復元した親族関係から社会変容を推定し、通過儀礼（葬送行為・抜歯風習）の変容との関係を明らかにした。その結果、アジア地域においては国家成立前段階の中央政権もしくは国家の周辺域において、親族関係の変容が遅れるという先行研究を追認し、加えて通過儀礼の変容も遅れることから、部族から国家に至る社会変容と通過儀礼が連動しているというモデル化を行った。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to reconstruct the interrelationship between ritual and social complexity of ancient Asia, specifically peripheral area around the ancient states, in terms of osteo-archaeological perspective.Two methods were adopted for the reconstruction of ritual and social spheres.Kinship, one crucial aspect of society to estimate social complexity, was reconstructed by using tooth crown measurement analysis. The rite of passage was also reconstructed by osteo-archaeological analysis of ritual tooth ablation and mortuary practice.
The results reconfirmed previous outcomes that the transformation of kinship had time lag in peripheral area from ancient state. And integration of the dynamics of social and ritual aspects in peripheral area revealed that the rite of passage was co-transformed with the kinship during the formation process of state afterward tribal social complexity.

研究分野：人骨考古学

キーワード：古人骨　通過儀礼　葬送行為　抜歯風習　親族関係　社会変容

１．研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究動向

これまでの申請者の研究において東アジアにおける部族社会の変容と通過儀礼としての抜歯風習の変容の関連を明らかにしてきたが（舟橋 2010 など)、この成人抜歯衰退以降も低施行頻度ながらも抜歯習俗が維持されていることが古くから指摘されており、日本列島・韓半島の低施行頻度の抜歯風習のうち一部に関しては服喪儀礼に際するものであることが指摘されていた（田中 1995：1996)。

このうち古墳時代の服喪抜歯に関しては、家長権継承システムと服喪抜歯の施行率・施行対象の変化が関連していることが指摘されていた(田中 1995)。一方で、アジア以外の地域においてもヨーロッパやハワイ諸島の先史時代・歴史時代において施行頻度の低い抜歯事例に関する研究が行われており(Pietrusewsky and Douglas, 1993、Robb1997)、社会の変化と儀礼の変化が結びついている可能性が指摘されていた。

(2) 着想に至った経緯：通過儀礼と社会変容の結びつき

申請者の研究や上述の古墳時代服喪抜歯風習の研究により、成人儀礼の衰退期の様相や抜歯風習の儀礼自体の変化や施行対象者の変化が明らかにされており、部族社会のみでなく首長制段階以降においても抜歯儀礼の変化と社会の変容が密接に結びついていると予測された。

但し、成人儀礼衰退時期の低施行率の抜歯儀礼に関する研究は、上述の古墳時代抜歯風習の研究以外は施行率の加齢変化に基づく年齢推定のみで前出の古墳時代の研究例以降、施行年齢等の形質人類学的手法に基づいた研究は全く進んでいなかった。成人儀礼衰退時期は東アジアの諸地域および日本列島の内で地域差があり、抜歯変化の様相も地域差が想定された。一方で、近年も成人儀礼衰退期以降の抜歯事例に関する研究成果が出されたが、全く施行年齢等の形質人類学的データ・分析に基づいていない抜歯事例収集に終始していた（春成 2007)。

加えて、申請者の研究成果により服喪抜歯風習が衰退した地域においても、葬送儀礼の中にその痕跡を残した類似行為が存在することが明らかになってきており(舟橋 2010)、抜歯風習のみでなく葬送行為も含めた通過儀礼変容プロセス解明の必要性があった。

加えて、社会の進化段階と儀礼を対比するために社会の進化段階を評価する必要があり、そのための基礎作業として葬送習俗及びそこから復元される親族関係に関しても分析を行う必要があった。

したがって、アジア諸地域の抜歯施行頻度が低くなった時期の人骨を実際に観察するあるいは報告書等に基づきデータ収集することにより抜歯事例を発見し、施行年齢等形質人類学的データに基づいて儀礼を推定することは急務であった。また、葬送行為に見られる抜歯儀礼の痕跡行為の有無および内実を明らかにし、諸地域における儀礼変容の実態を解明する必要もあった。加えて、歯冠段階に関しても検討を行う必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、アジア諸地域において見られる低施行頻度の抜歯風習・葬送行為を主な研究対象とし、社会の複雑化と儀礼の抽象化のモデル化を行うことにあった。本研究は、これまで形質人類学・考古学・民族誌学のいずれかの方法に偏ってアプローチされてきたアジア地域における抜歯研究を、考古学・形質人類学双方の方法によって総合的に分析する点に特色があり、また、得られた分析結果に関して民族誌学的事例との対比から考察を行い、アジアの各時期・地域ごとに抜歯の社会的意味を解明する点が本研究の目的であった。これにより、列島を含むアジア諸地域における儀礼の役割の比較検討および部族社会以降の社会変容と通過儀礼の関係を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、アジアの諸研究機関において先史・古代遺跡出土古人骨を実際に観察することによりデータを収集しようと試みた。古人骨に関しては、形質人類学・歯科学的手法を用いて抜歯風習に関するデータを収集・分析した。加えて考古学的手法を用いて葬送行為に関する情報の精査・分析を行い、抜歯個体の社会的地位を明らかにし抜歯儀礼の復元を行うとともに、人骨に供献された歯牙や代替品の存在を明らかにした。これにより抜歯風習及び抜歯儀礼が抽象化された行為の復元を試みた。さらに、世界の民族事例を集めた HRAF 資料を用いて、未開社会の通過儀礼の事例収集を行い、抜歯を伴う通過儀礼解明の手がかりとした(図 1)。

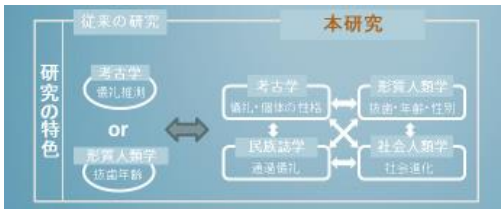

図 1 本研究の方法的特色

加えて、社会進化段階の解明に関しては、墓地から復元される葬送行為とともに歯冠計測値を用いた血縁関係の推定方法を行い、親族関係の推定を行った。この結果と先行研究における社会進化段階の評価を総合して分析対象集団の社会進化段階に関する評価を行った。

以上のように形質人類学・考古学的手法を用い、補足的に民族学的情報を用いることにより、抜歯衰退期前後にあたると考えられるアジアの部族社会変容期以降の抜歯風習及び代替行為の解明とそれに基づく通過儀礼と社会変容のモデル化を行った。

４．研究成果

多分野に渡る研究手法を用いることにより、考古学的手法のみからでは明らかにし得なかった抜歯風習の具体像を明らかにし、考古学における学際的研究手法採用の有効性を示した。具体的には、①中国周辺域としての中央アジア・台湾・韓半島・日本列島における儀礼変容の遅れ、②日本列島の大和政権周辺域である関東・南近畿・南九州地方における社会変容の遅れと葬送儀礼・抜歯儀礼変容の遅れ、を明らかにした。半島・列島の研究成果に関しては論文および学会において成果を公開した（図 2・図 3・図 4 など）。

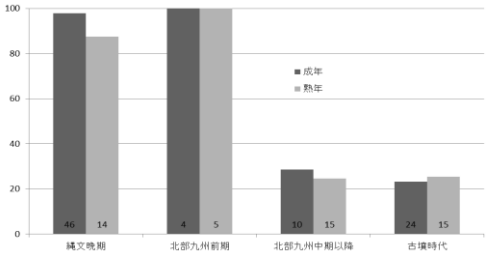

図 2 列島抜歯施行頻度の時間的変遷

（学会発表②舟橋 2012 より）

加えて、抜歯風習という儀礼を通して、アジア全域の社会変容に見られる共通性および地域的独自性を明らかにすることも可能であり、アジア史復元に大きく寄与するのみならず、それに基づく社会の複雑化と通過儀礼のモデル化を行い、人類社会研究に大きく貢献することが可能となった。

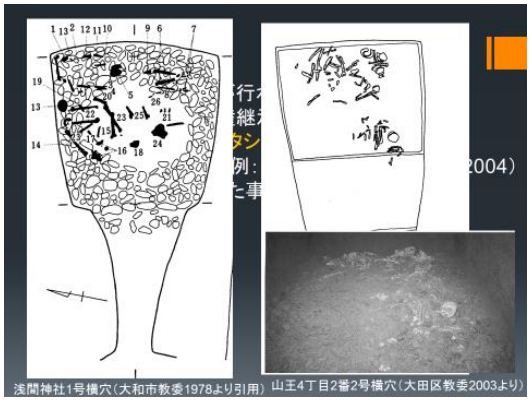

図 3 列島国家形成期関東における葬送儀礼の事例

（学会発表②舟橋 2012 より）

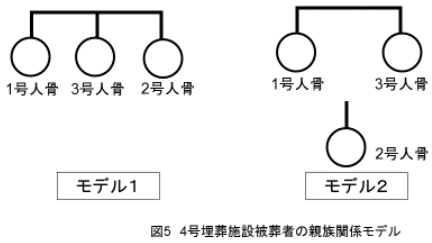

図 4 列島国家前段階における周辺域の世代構成復元モデルの事例

（論文②舟橋 2014 より）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

① 舟橋京子，2015 年：福岡市卯内尺古墳群４号墳出土人骨の親族関係について九州大学総合研究博物館研究報告．13 : pp1-8.

② 舟橋 京子，2014 年：磯間岩陰遺跡出土人骨に見られる親族関係．高倉洋彰編，東アジア古代文化論攷，Ⅲ：pp268-278.

③ 舟橋 京子，2012 年：韓半島先史時代抜歯風習について．동아시아의 문물 ,2：pp183-198.

〔学会発表〕（計３　件）

① 桜岡正信・杉山秀宏・宮下寛・徳江秀夫・坂口一・舟橋京子・田中良之・右島和夫，2013 年 5 月：金井東裏遺跡の甲着装人骨について．日本考古学協会 2013 年総会，東京．

② 舟橋 京子，2012 年 12 月，古墳時代抜歯風習の比較研究 ―関東地方を中心として―,平成 24 年度九州史学会総会,九州大学.

③ 舟橋京子，2012 年 08 月，第 15 回人類学研究交流会『日本先史社会の抜歯風習』，九州大学.

〔図書〕（計　2　件）

① 田中良之・舟橋京子，2014：菓子野地下式横穴墓被葬者の親族関係．都城市文化財調査報告書第 113 集　都城市内遺跡 7：pp44-46．都城市教育委員会，都城市

② 舟橋京子，2013 年：抜歯風習から見た社会集団．土生田純之編，事典　墓の考古学：pp39-41．吉川弘文館，東京．

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

舟 橋　　京 子 （ 石 川　　京 子 ）

（　FUNAHASHI, Kyoko　）

九州大学・総合研究博物館・助教

研究者番号：80617879

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：